「無の神学の焦点」

──著作集第３巻『無の神学』刊行記念講演会──

１９８２年５月２３日　於京大会館

小池辰雄

# 【見出し】

●キリスト道　　●聖霊のバプテスマ　　●無的実存者　　●十字架の土台に聖霊が来る　　●根源の現実　　●時は満ちた

# ●キリスト道

普通、キリスト教と言いますね。私はキリスト道と言っております。日本人は道の民であるからです。剣道、柔道、弓道、華道、茶道。真理を身に体することを道という。日本人は非常にいい角度を持っているわけなんです。それが、もう非常に稀薄になってしまった。残念です。もういっぺん道の世界に帰らないとドウにもならん。よくそのことをに銘じてください。教師ではないんです、道師なのです。道師でないような先生がたくさんいらっしゃるもんですからね、これまたドウにもならん。私は悪口言ってるんではない。やむを得ずして本当のことを言うだけのはなしです。

それから、聖書と言うと、神聖なる書だもんだから棚の上に上げてしまって、ちりほこりになっても滅多に開かない。

２０年前、ハンブルク大学で一年間、日本学の専任講師をしていたことがありますが、日曜毎にルッター教会に私は出席していました。見ていると、皆、聖書を持って来ないんだね、聖書も賛美歌も。教会に備えてあるのを借りてやっている。それで私は副牧師の人に言ったんです。

「いったい、これは何ですか。マルティン・ルッターは、聖書を炉辺の書として親しむように作った。身辺から離すことのできないのが聖書ではないか。どうか皆に、聖書を持って来るように言ってください」

と。プロフェッサー小池がこう言った、と言って伝えました。ところが、相変わらず持って来ない。ドイツ人もダメですよ。私はキリスト教を、キリスト道を逆輸出してやった。向こうの聖書の時間に、５、６回話してやりました。

「キリストは聖霊のバプテスマをなさる方であった。いったい、水のバプテスマばかりやって、ちっとも聖霊のバプテスマを受けてないではないか」

と。ハンブルクの教会新聞に「現代キリスト教界の焦眉の問題」と題して書いてやりました。

そんなことで、いわゆるキリスト教国もダメなんです。仏教も今、おそらく低調なんでしょう。中には素晴らしい方もいらっしゃいます、勿論。２０世紀はもうあと２０年しかない。これ正直、危ないね。私の出している「エン・クリスト」という季刊誌の第４号に「宗教と文化」と題して書いたものがありますから、どうぞ読んでください。

「空気は吸わざるを得ない。霊気は魂が吸わざるを得ない」

と、そういう境地になったらもう、何が何でも大丈夫なことになる。今のキリスト教信仰は、信じ仰いでいる、文字通りに。「仰」ぐではなく、「交」わるでなければダメなのです。信仰は、本当は信交なのです。

# ●聖書はドラマ

今、本当のことを言う人がになってきたから、私みたいな素人が言わざるを得ない。私は神学校を出たのでも何でもない。

「聖書はドラマだ」

と、私は言っているわけです。神さまのドラマです。イスラエル民族をとっつかまえて、旧約聖書に見るように劇的な展開を、救済の道を開いた。そして、全世界に展開してきたところの、闇の世界を光の世界に変えようとしているドラマですが、残念ながらこれは悲劇的であります。人間の不信のために、悲劇的なドラマです。

聖書は、だんだん世の中が良くなるとは書いてない。新天新地は直線的にはやってこない。大きなカタストローフ（破局）がくる。そうであればこそ逆に、神の国を銘々が体現しなくてはならない。神の国は身をもって証して行く人達によって展開してくる。決して希望を失わず、祈り待つのです。を伴わない祈りは空しい。実存をもって証して行くことが本当の祈りなんです。

この「無の神学」、この一巻は２８歳の時に、初めて書いた文章から始まっています。「祈りの宗教哲学」という文章です。もうその時に結論として聖霊のことを書いているので、自分でもびっくりしている。方向は一貫していたようです。ちょうど２０歳の時、内村鑑三先生の集会に出かけて行った。内村鑑三、藤井武、塚本虎二と相前後して三人の先生についた。

実はそのもうひとつ前に、小池政美という私の兄貴がいるわけです。今からちょうど６０年前、１９２１年に北京の日本公使館員であった兄は、腸チフスにかかって倒れた。兄の死は、私にとっては犠牲の死でありました。あらゆることにおいて私より優秀な兄貴です。学校の成績は全美。そういう兄貴が倒れてしまったから、私の生涯はそれから合戦です。兄貴を天界に置いて、福音の戦いをやってるわけです。去年は不思議なことに中国の旅行をしました。そのことはこの『無の神学』をお読みになるとわかりますが、口絵に天壇の素晴らしい七宝美術の絵がありますが、その裏に書いてあることも御参照ください。

内村鑑三先生は預言者です。明治、大正、昭和にかけて日本の第一級の人物です。ビスマルクは、

「我々ドイツ人は神のほか、何者をもおそれない」

と言いましたが、内村先生もそのような人でした。預言者魂で、詩人でもありました。そのお弟子さんの藤井武、これはまさに詩人。哲学的な、優秀な方です。塚本虎二、これは素晴らしい学者、第一級の聖書学者です。預言者、詩人、学者というような先生に相前後して私はついて来た。

# ●聖霊のバプテスマ

五番目に手島郁郎というちょっと変わった人物と阿蘇でもって集会をした。その集会のものすごい祈りの世界で霊界のキリストから聖霊のバプテスマを受けた。十字架をもちろん瞑想してました。私は坐って祈っていたのに、５０センチくらい坐ったまま空中に上がってしまった。おったまげたね。全身しびれてしまった。パウロのように、聖霊に打たれた。そして、帰りの汽車の中で聖書を開くと、文字が躍っているわけだ。「聖霊、御霊」なんていう言葉が光るが如くに目に訴える。今まで何を読んでいたかと、ハッキリ次元が違いました。自分の信仰なんて、そんなことではなかった。信仰がどうのこうのなんて、そんなことは問題ではなかったということに気がついた。

それから不思議なことが起きました。私が祈りの世界で手をおけば、脊椎カリエスの方が一時間くらいで直ってしまった。その人も異言が発してきた。私自身がびっくりした。「こういうことがあるのか」と、使徒行伝的な質の現象が展開してくる。私は聖霊体験してから、無教会に嫌われた。私は無教会の本流にいたから、いろんな役割を果たしていた。ところが、

「小池は変わった。藤井の信仰とも違ってきた」

ということで無教会からアウトサイダーにされました。キリストの直弟子のパウロ、ヨハネ、ペテロ、ヤコブのインサイダーに私はされたから、天界に素晴らしい先輩がいらっしゃるから、天地相応える世界だから、痛くもかゆくもない。むしろ逆に、

「どうぞ、この世界に入ってくださるように」

と時おり真剣に祈るけれども、なかなか無教会はパリサイ的になっているから入ってこない。

「偽善なる学者・パリサイ人よ！」

と、キリストは言われた。

「聖霊に逆らう罪は許されない」

と書いてある。もう私は今、全身、火のようですよ。火でもあり、涙でもあります。

とにかく問題は、

「教会といわず、無教会といわず、キリストの直弟子の次元に戻ろうではないか。それが本当の前進だ」

と。もう頭の判断はよしなさいよ。いわゆる分別の世界ではどうにもならん。

その点では、仏道の一流の坊さんたちは、はるかに素晴らしい世界を証してきました。ああいう方々の伝記を読んだり、言ってるものを読んだりするのは、非常に私は楽しいです。同次元的な世界だからね。道元であろうと、日蓮であろうと、最澄であろうと、空海であろうと、親鸞であろうと、法然であろうと、白隠であろうと、禅宗の本であろうと何であろうと、皆、読めてしまう。これは不思議ですよ。

「それでは、あなたはキリスト教と仏教をゴチャゴチャにしているのか？」

「いや、冗談言うな！　キリストの光で、皆これが把握できるんだ」

と。それくらい素晴らしいんです、聖霊の世界は。

# ●南無キリスト

「なるかな霊の貧者、天国は汝のものなり」

と、マタイ伝とルカ伝とをまぜたような言葉を私は書いた。これは山上の垂訓ではない。大告白です。キリストは自分をさらけ出している。お釈迦さんもそうですよ。

「八万四千の法を説いたが、私はひとつも説かなかった」

と。なぜ、お釈迦さんがそう言ったか。

「お前たちは自分で体験するまでは、聞いてもそれは聞いたことにならない」

という。

私にとっては、１９５０年は次元的な飛躍をした年なんです。人生には峠がいくつもある。大きな峠を乗り越えました。７８歳ですがまだ序の口だと思っている。

「キリスト！」

と言うだけで、

「南無阿弥陀仏」

「南無妙法蓮華経」

と同じことなんです。

「南無キリスト！」

と言えば、直ちにその世界に入る。さすがに親鸞、日蓮は素晴らしいですよ。「」とは、そこに「帰依、帰入する」こと。私はこれを、祈り入る、「祈入」とも書く。「アミダブツ」「無量寿無量光の覚者」。その中に帰依すること。日蓮にとっても、「妙法蓮華経」は実体だから、単なる文字ではない。

「法華経を頭で読むやつはたくさんいる。心で読む人はだいぶ少ないが、お前はからだで読め」

と。あれは日照にだったか、佐渡へ行く前に言った。「」とも言う。

「全存在で読め」

ということ。ところが、頭デッカチだね、文明人というのは、頭でしか読まない。

# ●無的実存者

「霊が貧しい」というのは、自分を何者ともしないこと。ある青年が、

「善き先生！」

と呼びかけたら、キリストは、

「何故、私を善いというか。善いのは神さまだけだ」

と言われた。

「私は何もできない。神さまがさせている。何も教えない。神さまが言えということを言ってるだけのはなしだ」

と。なぜ、そういう言葉に注目しないんでしょうかね。

「私は何ものでもない」

と。これを無的実存者、無者ともいう。『無者キリスト』〔著作詩集第１巻、1975年刊〕と『無の神学』〔著作詩集第３巻、1982年刊〕は姉妹篇みたいだから、よくお読みになってください。私は遺言だと言った。いつぶっ仆れてもいい。破れた本です。ルッターも、

「聖書は神さまの言葉のカケラだ」

と言った。すべてのことは新天新地でうされる。地上できものなんかひとつもない。破れ器でありながら、全き質を持っている。そういう在り方。一日において千年を生きる、永遠を生きる、その生き方。

「いつぶっ仆れても、アーメン、ハレルヤです」

と。「ハレルヤ」とはヘブライ語で「汝ら神をほめたたえよ！」という意味です。

人間は皆破れています。破れているくせに整ったような顔をするからいやだよな、この体裁というのは。破れていないと、星の光が射してこない。この本の357頁に出てますが、幕屋の各人は、三角錐体の底面の三角形ａｂｃです。大黒柱はキリストの十字架。天幕の中には聖霊が充満している。そういう幕屋です。これは方々破れている。そうすると、星の光が射してくる。神さまの啓示の光がきます。

「二、三人わが名の中へと集まるところに我あり」

というキリストの言葉がある。キリストの名、聖なる名、これは実名です。名を呼べば応えてくださる。

ペテロが、生まれつきの足なえに、

「金銀は私にない。ただ我がうちにあるものを汝に与う。キリストの名によりて歩め！」

と言ったら、生まれつきの足なえが立ってしまった。まぁ驚いた、みんな。そういう現実なんです。聖書の現実はものすごい霊的な現実です。研究なんかで読める現実ではない。ぶっ倒れながら、降参しながら読まないとダメです。

天幕を張りながらイスラエルの民は旅をしていた。アブラハムから皆、そうです。詩篇２３篇はそのようなイスラエルの民の在り方をしく歌っている詩篇です。世界の歴史は神さまの旅の歴史である。やがて新天地を出現させ給う。黙示録で示しているあの暗号的内容は、もっとすごいことが出てくるはずだ。天界にも涙がある。感激の涙です。

この頃の青年はあんまり感激しないようだが、ダメだね、なにも青年や少年を責めません。我々教育者がわるかった。全国高等学校長会議で、私は校長さんたちに、

「山に籠もって冥想してから教育を始めようではないですか」

と、三回言いました。単なる教育の方法とか何とか、そんなことで片がつかないんです。魂は一対一の、愛をもってうような教育でないとね。

こういう在り方がエクレシヤ、召団です。呼び出された者の群、召し出された者の団体です。パウロは、

「キリストはで、我々はそのである」

と言いました。そういう生命的有機体である。制度ではない。

世界的神学者のブルンナーという人が『教会の誤解』という本を書きましたが、これは素晴らしい本です。

「原始キリスト教においては、もっと聖霊の働きがあった。聖霊のないところに教会は、エクレシヤはない」

ということをハッキリ言っている。ブルンナーも、バルトも、生涯の終りになって、

「本当に今までの神学は、聖霊をいい加減に取り扱っていた」

ということに気がついて語っています。

# ●十字架と聖霊の二焦点

「焦点」と私が言ったのは、楕円は二つの焦点を持っている。十字架と聖霊、これが楕円の二焦点である。無の神学の焦点です。我々の実存は、キリストの十字架と聖霊によってこの二つの焦点を持っている。

十字架というのは──完全に神さまの意志に従って、自分を無として、キリストは実存した。これが、罪がないということ〔義〕、無罪なんです。無者は即ち無罪者である。

「義人なし、一人だになし」

とパウロは言った。我々は無者になり切れない。無者修行しないとダメなんだ。だけど、修行したってダメですよ。しかし、キリストは無罪。無罪の人が有罪なる我々に代わって、十字架にかかった。我々の自我、エゴイズムという罪を、

「それを全部、私は引き受けて十字架にかけてしまった」

ということ。パウロが、

「我れキリストと共に十字架せられたり。もはや我れ生くるにあらず。キリスト、我が内にありて生き給うなり」（ガラテヤ2･20）

とは、聖霊のキリストです。キリストの聖霊が私の中で生きている。あのガラテヤ書２章20節は、プロテスタントがしょっちゅう引用する言葉だけれども、その真義を本当に体得していない。命題を信じているだけです。私も永いことそうだった。

聖霊のバプテスマというのは──まぁ体験の仕方はどれでもいいです。パウロは十字架を知らないで、いきなりキリスト（聖霊）にやっつけられた。

「サウロ、サウロ、何故、我を迫害するか！」

と、ダマスコ途上でひっくり返されたでしょ。それで三日間、目が見えず、耳が聞こえず、ものが言えず、アナニヤという聖霊の器に按手されて目がさめた。

「わが目よりの如きもの落ちたり」

と。使徒行伝９章をよく読んでください。そして、パウロはそれから祈り、冥想していたら、十字架がハッキリと彼に受けとられてきた。

「何の十字架であったか。それは私をすっかりってくださった」

と。キリストは素晴らしい方だから、ヨハネ、ペテロ、ヤコブ、この三人の直弟子に直接、聖霊を与えられそうなものだが、キリストはなさらない。何故なさらないか。それはまだ罪のいをしていないからです。

「自分は受くべきバプテスマ、即ち十字架がある。ここを通ったら、お前たちは祈って待っていろ。そうしたら、聖霊がやって来るぞ」

これがペンテコステです。クリスマスや復活節よりもペンテコステがクリスチャンには一番大事なんです。それをいい加減にしているね、みんな。だから、いつまでたってもダメなんだ。私は無教会にいたときには、ペンテコステなんてひとつもやってくれない。

教会と無教会とがただ対立してるようなことではダメなんです、相対的な対立は。どれだっていいんですよ。どうせ人間はみな、相対的な存在で、地理的にも歴史的にも、生まれもいろいろ違うんだ。カトリックの世界に生まれれば、カトリック的にもなるさ。いいよ、何でも。プロテスタントの何教、何派、どれでもいい。しかし、そこで本当のことを受けとれば、その相対性に間違いがあったら、それを直すだろうし、どうしてもそこに居られないとなれば、そこを出るだろうし。何も外側のことを整える必要はない。内側から本当の生命がくれば、余計なやなんかは落ちて行く。

# ●十字架の土台に聖霊が来る

キリストが十字架を通らなければ、聖霊は来ない。このことに今のキリスト教会が気づかなくては。私はいろんなものを読んでも、ハッキリそのことを言ってるのをまだ知らないんだ、残念ながら。

「十字架が土台だ。それでなければ本当の聖霊ではないぞ」

ということなんです。よく祈り三昧でね、

「聖霊が来た！」

とえらく熱っぽくなったりして、現象的には聖霊的現象も起きますよ。しかし、危ないです。へたすると、霊的傲慢になる。霊的傲慢は最大の罪です。

ルッターが「マリヤの讃歌」の中で書いているとおり。来年はルッターの五百年祭でね、私はルッターの本を来年また出しますけれども〔著作集第７巻『聖書の人ルター』1984年刊〕。

十字架の土台のところに聖霊が来る。だから、

「十字架を本当に受けとりなさい」

ということ。

「汝の罪、赦されたり」

と。汝という罪は赦された。贖われた。相対的な汝は相変わらずダメでも、

「そんなことは心配するな、そんなことを見るな。こっち（私の十字架）を見ろ」

と、キリストはそう言っている。十字架です。私はもうすっかりふっ飛んでいた。単なる論理ではない。本当にふっ飛んでごらんよ。十字架でぶっ飛ばされているから。

「罪は、あれどもなし」

ということ。

「でも、相対的なこういうこともあるじゃないですか？」

と。ああ、ありますよ。でも、そんなものはもう判断の世界に入らない。そういうところに自分を入れてごらん。がぜん聖霊がやって来ます、ハッキリ！　ぶったおれますよ、全身がしびれてしまうから──しびれなくってもいい。体験の仕方はいろいろだから──春雨のごとく、静かに入ったっていい。人間によっていろいろある。神さまは芸術家だから、類型的に造ってないですから。ひとは目が二つに耳が二つ、鼻が一つ口が一つ、みな同じなんだけれども、これが全部ちがう。指紋までちがう。いろんな動物、植物も、神秘ならざるはなしです、すべて。

「なぜ？」

といっても、わからないんだ。

「事実そうである」

というより仕方がない。菊に、

「なぜ、お前はそんな花びらをしているのか？」

なんていってもどうにならん。時々テレビで、「自然のアルバム」なんてやっているね。あれは面白いから見てるんだけれど、本当に素晴らしいもんだ、神のわざは。

# ●「神・自然・我」が一如

ゲーテという人は、非常に自然が好きだが、自然において本当に神を、神的なわざを見ていた。ゲーテの素晴らしい言葉があるから引用しよう、晩年の詩集「神と世界」（Gott und Welt）から、

「この宇宙を内側から動かすことが神にふさわしいわざである」

自然において神の力を彼は本当に見ていました。

「神が、もし鳥のたましいにその雛鳥に対する全能的本能を与えておらず、また同じ本能が全自然の生きとし生けるものに与えていないとするなら、この世界は存続し得ないであろう！　けれども、神の力はくゆきわたっており、永遠の愛はいたるところに作用している。」

親鳥はその雛鳥の命がやっつけられそうになると、自分の命を挺してこれを護ろうとする。このような愛が、生物の中におかれているのはみな、神さまから来ている愛だ。ゲーテは、「アガペー、エロース、フィロース」なんて分けない。神さまから来ている愛がいろんなわれ方をしているだけだと。恋愛にも顕われる。親子の愛にも顕われる。師弟の愛にも顕われる。犠牲的愛にも顕われる。本当にそうだよ。ゲーテというやつはすごいよ。

すべてメタモルフォーゼ（変容、変身）を起こしている。ものの本質をぐっと見る非常な目を持っている。「根源」（）という言葉が好きで、根源植物、根源動物といったり、「花も葉の変形である」と言い出したのはゲーテですよ。万象における妙法を見ている。すべて法の世界ですから。水は低きに流れ去る、これが「法」の字。漢民族は世界最高の文字を作った。

「神さまには、この宇宙を内側から動かすことが彼にふさわしい。

自分の中に大自然を、また自分を大自然の中に抱いている」

なんて、面白い言い方をしている。

「神の中に生き動きまた在るところのものは、決して神の力を、神の霊を失うことなし」

という。私の大好きな言葉です。私たちには、

「キリストのうちに生き動きまた在るときに、キリストの力は、キリストの霊は、決して失われることはない」

ということ。これだけのことが言えないんです、日本の詩人は。魂が絶対界とつながっていないから。

「日本に大詩人がでよ！」

と、内村先生が悲願していたが、そのためには大思想が要る。大思想というのはただ思想ではない。聖書のこのケタちがいの霊的な現実の世界に、この根源現実の世界に入らないとダメです。

プラトンがなぜ偉大な哲学者かというと、彼もイデアの世界を現実に持っていた魂だったから。カントの哲学もそうです。キリストの信仰から来ているんです。偉大な芸術もみんなそう。バッハ、ベートーヴェン、シューベルト、レンブラント、ダヴィンチ。彼らの偉大さがどこから来ているか知らないで、ただ外側からみている。しょうがないね、なぜその文化の根源である聖書の世界を知ろうとしないか。

ゲーテは、「神・自然・我」というものがになって動いていたような魂です。だから、彼の文学はすごい。イギリスではシェークスピアでしょうね。イタリヤではダンテでしょう。彼らが何故でっかいかというと、でっかいものに自分を投げかけていたからです。「自分の才能がどうだ」なんて、もうそんなことはよしなさいよ、無でいいんだから。

「ゼロ＝無限大」（０＝∞）

になってくる。自分でも驚くようなことが始まる。創造的な人間になる。

# ●根源の現実

私の神学の中心になっているのは、

「キリストの実存が無である」

ということ。

「何もできない。何も言えない。なぜ私を善いと言うか」

と言った人が、

「私を見たものは神を見た」

と言う。「神さまがあるか、ないか」と議論したって始まらない。

「キリストに来い！　福音書のキリストに来て、神が見えなかったらいつまでたっても始まらんぞ」

と、ハッキリ言ってやりなさい。それくらいの権威を持ってくださいよ。主観ではないです。魂の世界はごまかしがきないですからね。本ものが入るまではどうしても何か欠けている。

私は無教会の信仰の筋は良いと思っています。でも、なにか欠けていると思っていた。祈りが欠けていた。祈りとはお願いではない。自分を投げ入れることですよ、キリストの中に。投げ入れることが祈り。キリストの中に投げ入れて、キリストの中で祈ってください、何でも。そしたら、自己中心ではなくなるから。キリスト中心になってくる。

現象面で現象しようがしまいが、病がなおろうがなおるまいが、もう根源ではなおっているんです。根源の現実では、既に健康者なんです。普通の健康者よりも絶対の健康がきてるんです。神の霊、神の生命が来ているんです。

「健全なる精神が健全なる肉体を造っていく」

のであって、「健全なる肉体に健全なる精神が宿る」のではない。逆ですよ。

「小池先生はなぜ、あんなに元気なんだろうか？」

なんてよくかれる。元気が、元の気が来ているからです。神・キリストの元から、霊界から力が来るからくたびれない。ちっとも疲れない。眠くはなるけれどもね。

# ●キリストの無者的実存

この焦点。神一切のキリストが神さまに、

「汝は罪なき者だから、罪ある者のために贖いをしろ」

と言われた。

「世の罪を負う神の」

とヨハネ伝で洗礼のヨハネが指し示している。「羔」となったということが即ち、十字架を負うことになる。甦えらざるを得ない。キリストはいきなり天界に行きたかったのだけれども、

「我が思いにあらず、汝のを！」

と言って、ゲッセマネで血のしたたるような祈りをした。

「約束の霊を与える。慰めの霊、執り成しの霊を与える」

とキリストは約束していた。それがやって来た。だから、さっきから申し上げている通り、十字架と、そして聖霊という、この順序とこの土台はハッキリしてもらいたい。十字架ぬきの聖霊なんてないですよ。キリストの無者的実存であるということ、これが無の神学の焦点です。

「では、我々はどうしたらいいのか」

というと、

「南無キリスト！」

でキリストに立ち還る。私はそれを「回帰」、めぐりかえる、と言っている。「回心」ではない。心だけではダメなんだ。全存在がキリストに帰って行く。この十字架・聖霊のキリストの中に自分を投げ入れて行く。これが我々の課題なんです。まず十字架を本当に受けとって、

「主さま、参りました！」

といって降参しす。かくも愛されたということ。無条件に赦されている。どんな罪びとも。十字架の贖いから例外にされるものは一人もいない。

いわゆる罪人、監獄にいる罪人よりも悪いのがいくらでもいるよ、世に幅かしてるのが。黙示録に書いてある。封建時代の代官だとか、上の方にいるやつ、あんなのはみな地獄行きだ。

全存在が神さま帰る。回帰する──これは繰り返し生まれるということではない──預言者たちが、

「神に帰れ、帰れ」

と言っている。ヘブライ語で「シューブー」という。宗教改革というのは全部、

「立ち帰ること、帰り往くこと」

です。神の歴史は、前進して止まずであります。これでいいなんていうところはありはしない。全部、キリストが次から次へと働き給うんだから。キリストが成し給うので、我々はその手足、生ける道具、生かされている道具です。

プロテスタントでも、カトリックでも、仏教の何派でも、イスラム教でも何でもいいですよ。問題は、名状すべからざるところから、ある人は「アラー」というかも知れない、ある人は「如来」というかも知れない、ある人は「」というかも知れない、ある人は「」という──ずいぶん私は乱暴だね──

「そこに絶対界から来ているところの何ものかが本当に生きているか」

ということ。宗派争いは要らん。政治家も政治の根本には、この絶対の宗教の世界を魂が持たなければ。社会改革も、問題は、社会を構成しているその個人の魂の世界の改革をしなければ、いくら社会改革の何のと言っても始まらない。

「欲が戦争のもとだ」

とヤコブ書にも書いてある。

学問をするのにも、芸術、事業、何をするのにも、元は魂の問題に帰するんです。そういう在り方をしてごらんなさいよ、楽しいから、力がくるから。

不思議だなぁ、何者でもないキリストの無者は。私はキリストの無者であると同時に相変わらずの罪びとです。そういう矛盾構造でありながら、こっち（無者）が断然勝って行きます。地上では三日月くらいなもんです。二日月かも知れない。けれども、必ず満月になります。これは私の自信ではない。恩寵の力が、恩寵の現実が私をそうさせて行く。皆さんもその通りです。

人生の目的は、そのような神の栄光の器と一人ひとりが成るように、人を助けて行く。これが本当に人を愛するということです。人助けをすることが、愛するということ。自分はどこまでも無者でいく。無者でなければ、本当の人助けはできない。ものすごい力が来るから、無者の世界には。そうなったら、運命、環境がどうなってもいい。悪くなればなるほど逆に力がくる。そういう証者になってください。皆さんの目玉の光が違ってくるから。底光りを発する。

# ●時は満ちた

『無の神学』をお読みになる方は第二部〔「無の神学への道」〕から読んでください、じっくりと。殊に若い方は。道すじを示しているわけですから。「新宗教改革」の項〔第一部第13章〕の178頁「キリスト・イエス」のところに、

「時は満てり、神の国は近づけり、

汝ら回帰して、福音に信じ入れよ！」（私訳）

とある。これはキリストの伝道の第一声です。

「時は満てり」

という。逃すことのできない時がやって来たぞと。

「神の国は近づいた」

とは何ですか。神の国は神の支配し給うところ。神の支配し給う実体はキリストです。

「神の国の実体が、私がやって来た。

私がやって来たぞ！　私は神の国の現象体だ」

ということ。私たちは地上にいますが、地上において天国を歩いているような人にならなくては。

「神の国の現象体キリストは近づいて来た。汝らは存在をひるがえして、この福音体なる私の中に信じ入れよ！」

と、こういうことですよ。「信入せよ！」と。「神の子である」という命題を信じたってどうにも成らん。キリストは、

「我を喰らえ、我を飲め」

とヨハネ伝６章で言ってらっしゃる。「信仰」なんてよしたらいい。信交、信受、体受です。

いいですか。私の劇的な話は、何か皆さんのに訴えたら、それで万歳です。頭で聞いたら、わからないよ。

「時は満ちた」

と。本当に今、時は満ちたんですよ、皆さん！　永遠の瞬間です、今日は。峠の時です！

「キリストという神の国が迫ってきたから、彼の中にめぐり入って、これを体受する、キリストを受けとる、しがみつく」

という──どう言ったっていいです──そういう現実です。

「帰り往く」という言葉を今、私は言いましたが、預言者の中には、

「私は帰ることができないから、が帰って来てください」（エレミヤ31･18～19）

「おお、私（神）はお前の中に帰って往くよ」

と、逆に神さまの方から言っている言葉がある。エレミヤのところをご覧になると書いてありますから、あとで見ておいてください。

子供がぶっ倒れて、「おかあちゃ～ん！」と呼ぶ。走って行けない。そしたら、お母さんが帰って来て、そして抱いてくれる。そういう世界です。それでいいんです。

だから、「回帰」という言葉は、私の神学の大事な要素になっている。帰り往きまた帰り往く。そのことが前進しまた前進することになる。仏教だって「南無」だもの。元に帰ると、元の気、元気がやってくる。天地の気がやってくる。

イデオロギーを超越した世界です。本当に人となる。霊がまることを「」（人）という。神霊の止まることを「人」という。「大言海」（辞典）に書いてある通り。その意味においても古典に帰らなければ。

自然科学的な知識はものすごく展開している。地球をのりこえてどこかへ出かけることをやっている。地球がだんだん住めなくなるから。魂の世界が狂ったから、すべてが狂ってきた。文明がゆきすぎた。物欲的知識が展開しすぎた。

とにかく、この福音の世界は、我々の生活、文化文明の一番根っこの世界であるということ。そこに立ち帰って本当の前進をする。どんなにマイナスが周りにさかまいていようが、神の国へ向かって、敢然として前進ができます。いかなる艱難も、いかなる運命も環境ものり切って行くことができる。聖霊ですから！　聖霊は驚くべき力を持っている。聖霊の愛は最高の力を持っています。相手を倒すのではない。全部、救い上げていく力です。終ります。

〔註〕本項は講演の録音を京大教授奥田昌道夫人奥田幸子氏の文字化による。感謝。